

三度目に微笑んだ女神。

日本語が満足に話せなくて、
英会話なんてナンセンス。
留学もおなじ。

英語がペラペラ喋れたり、
アメリカナイズされて喜んでる。

自分の生まれた国を客観的にみて、

“自分自身を旅してくる”人、

そういう人が少ないんだよなあ



STATE OF OREGON


Office of the Secretary of State
Corporation Division

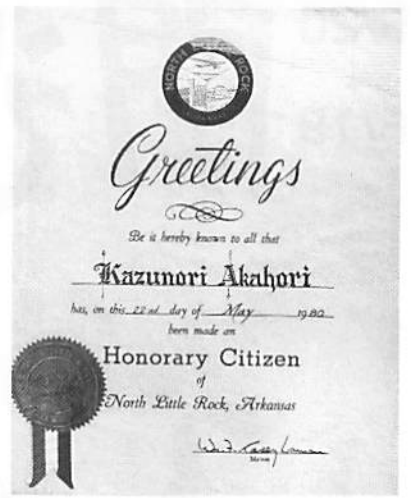
I, Janet Sullivan, Director of the Corporation Division,
DO HEREBY CERTIFY

ADMINISTER FOR INTERNATIONAL CONTACT
INCORPORATED
10101 SW 10th Street
Newport, Oregon 97156
December 8, 1994

and is a true and just record of the Corporation
incorporated and the date of this certificate.

Janet Sullivan
Director
By: *Robert J. Williams*
State Treasurer 11-1995





子どもの頃から大学は京都大学と決めていた。生まれは、西陣のト真中。ぎったん、ばったん機械の音を聴きながら少年時代をすごしてきた。

昭和四十六年、嵯峨野高校を卒業。勇んで入試を迎えた。だが慣れの京大は微笑んでくれなかった。予備校に通う余裕はない。どうしよう？そのとき、傍らに置いてあったトランプが、きらりとひかした。小学生のころから独学でマスター、片時も手放さなかったそれを見て心は決まった。

「京大がダメでもジャズがある」親は反対した。ジャズなんてとんでもない。だが、彼は東京に飛び出した。背中で「勘当だ！」と叫ぶ父の声を聞いたような気がした。

ヤマハ・ジャズアンサンブルコースには、講師陣にナベサダ（渡辺貞夫氏）がいた。トッププレイヤーの姿からは、いつも、そこはかとなくニューヨークの匂いがした。いつか自分もアメリカでセッションできるプレイヤーになりたい。大好きなマイルス・デイビスを思い浮かべては、ひそかに自分の姿をオーバラップさせる日々がつづいた。

音楽はいつも彼に夢を与えてくれたが、「生活」は彼に現実を教えてくれた。新聞や牛乳の配達、バーテンダー……できる仕事は何でもやった。しかし、二年の授業を経て、大きな壁が目の前に現れた。トランプではセミプロの域に達したが、自分の求める「音」は、どうやら一生かかっても

出そうにないことに気づきはじめた。すぐそばに見えていたはずのマイルスがだんだん遠くなる。やがてその背中は遥かなオクターブの彼方へ消えた。LPジャケットの中でいつもシニカルなマイルスもまた、彼に微笑んでくれなかった。

どうしよう！

今度は、スグに決断できなかった。頭の片隅で何が明滅していた。ジャズのLP（輸入盤）の前に、つくねんと辞書をひいていた子どもの頃の自分が、なぜか思い起こされた。

とりあえず京都に戻った。今なら、さしずめ「ブー太郎」になるのだろうか。何となくこともなくフラフラした。

「ええかげん、就職しなあかんで」

周囲の忠告にアセリを覚えはじめた。そんなときである。京都新聞の求人欄に「国際青年交流委員会・企画部門人員募集」とあるのが目についた。応募の手配をすませ、面接会場へむかう。

ジバンにTシャツ姿で面接会場に出かけたのは彼ひとりだった。遅刻したのも彼だけだ。スーツ姿をビシッと決めた他の応募者を見て、戸惑った。おまけに、そんなスーツ野郎の中には某老舗観光ホテルや有名旅行代理店の現役社員の姿もあった。

「やっぱり、あかんのやろなあ」

しかし……当時、文部省に籍を置いた任意団体・国際青年交流委員会はどういうわけか彼に微笑んでくれた。

採用されて間もなく、彼は西日本支局

国際交流委員会代表理事

「KAZUNORI AKAHORI」

赤堀一則

その時の出逢いが
人生を根底から
変えることがある
よき出逢いをも
みつと

長に任命された（もともと局長は女性一名だったが）。そこで得た経験が、後の人生を決定することになった。着任早々、全米十七州を巡回。それは教師の海外研修だったが、なんと二十四歳の彼はリーダーとして先生たちを引率した。まるで白亜の殿堂さながらのKFC本社では、カーネルサンダースと握手した。あのサンダースおじさんは、やっぱりサンダース人形にソックリだった。ニューヨークでは、有名なジャズクラブを渡り歩いた。レコードでしか知らなかったプレイヤーたちが、目の前で演奏している。おなじ空気の中にいることが信じられなかった。

そんな活動をつづけながら京都外国語短期大学に入学した。海外留学の動向を知るためだった。当時、ホームステイになる和製英語はまだ一般的ではなく、ステイ・

ウイズ・ファミリイなどと呼んでいた。その知識や活動の基礎を彼は支局の中で学んでいた。だが、国際青年交流委員会が某大手旅行代理店の子会社に転身することが決定。彼は辞表を提出する。「旅行会社に就職するつもりはない」のが理由だった。

国際交流活動の身をマスターしていた彼は昭和五十一年、CIC・国際交流委員会を設立。留学ブームが国を動かしはじめていた世情の中で、さきがけとして乗り出した。その頃、同志社大学の前に事務所を構えていた彼はCIC英会話スクールの開校。当時ではめずらしい「外国人講師のみ」の指導をヒットさせ活動資金も捻出した。

CICの活動として最初に着手したのは、日本人学生のアメリカ留学だ。某日

本国放送局の英会話テキストに広告を出稿、全国をキャラバンして、一五〇名あまりの学生をあつめた。これはビジネスとしても大成功だった。そして大阪大学交響楽団をアメリカに、また京都大学交響楽団をオーストラリア・ザルツブルグ音楽祭（一）に派遣と、本来の国際交流活動も軌道にのせた。

今日、その実績を数えあげれば、それはキリがない。各大学の交響楽団・吹奏楽団の海外派遣。また、アメリカ・ヨーロッパの各大学音楽活動グループの招聘。アメリカ公益法人CUPPとの共同による日米二十六大学の姉妹校提携。日本の経営研修プログラムでは、ハーバードなどアメリカの各大学と日本の大手企業や経団連、通産省とを結び役割も果たしている。

彼……いや、もうそう呼ぶのは失礼だ。国際交流委員会・代表理事の赤堀一則氏は、今でもジーンズ姿の似合うとても気さくな人物である。

「国際交流活動は、いわば僕の道楽。その道楽のために英会話部門なんかで稼いでいるのです」と語る氏。最後にこんなコメントを載せた。

「日本語が満足に話せなくて、英会話なんてナンセンスだと思う。留学もおなじ。みんな、留学して英語がペラペラ喋れたら、アメリカナイズされて喜んで。自分の生まれた国を客観的にみて、「自分自身を旅してくる」人、そういう人が少ないだよなあ」